

|        |   |
|--------|---|
| 大学等名   | 札幌医科大学  |
| テーマ名   | テーマ1：地域活性化への貢献  |
| 取組名称   | 地域密着型チーム医療実習  |
| 取組学部等  | 全学  |
| 取組担当者  | 保健医療学部長 丸山知子  |
| 取組期間   | 平成16年度～平成18年度   |
| Webサイト | <a href="http://web.sapmed.ac.jp/gp/">http://web.sapmed.ac.jp/gp/</a> |

#### 取組の概要

地域全体を把握し理解するための地域密着型実習を医学部・保健医療学部合同で行うことが本取組の内容である。本取組では、新しいチーム医療カリキュラムを開発し、医学部、保健医療学部（看護、作業療法、理学療法学科）所属学生の混成チームによる、地域における滞在型実習を行った。別海を中心とする道東をモデル地区に設定し、地域病院でのプライマリーケア、保健所・リハビリ施設・役場・学校など多様な施設で住民の生活に主眼を置いた生活の質的向上、予防医療を志向した実践活動を中心に実習を行った。本実習により、地域に対する理解を深め、積極的に地域医療を志向する学生を養成することで、卒業生の地域への定着数の増加が期待された。実習先医療機関スタッフや行政職員に本プログラムでの学生教育への参加を依頼して行われた。地域と大学の有機的な連携による地域固有の問題の共同研究の促進等により、地域の医療・保健の活性化が図られると同時に、地域住民の安心感の醸成から地域人口の増大など経済面も含めた地域の活性化につながることを期待された。

#### 実施の経緯・過程

##### <平成16年度>

本学は道立の医科大学として、北海道の地域医療に貢献しうる医療人を育成し、かつ国際的にも活躍できる医療人、研究者の育成を理想として掲げてきた。医師、看護師、作業療法士、理学療法士を育成する医療系総合大学として、包括的に地域医療に対応する人材を育成することを念頭に置いており、今後、ますます、この役割を果たすことが求められている。本取組は本学建学の精神でもある「医学・医療の考究と地域医療への貢献」に鑑み、地域医療に貢献する人材育成のために早期から教育を行うことを決めた。初年度にあたる平成16年度は、道内の医療過疎地域である別海をモデル地区として、地域の高度医療の拠点である釧路、中標津での実習を計画した。そして各医療施設へ協力要請のために新しい教育の目的等の理解を請うための準備を行った。本教育の目的を以下の三点とした。(1)プライマリーケアについて理解し、地域における健康に関する課題に対し、介入方法を考案する。(2)人として医療者として人間関係の築き方を修得する。(3)自らの専門性を認識し、地域におけるチーム医療の重要性を理解する。

平成16年度の後半は、平成17年度に地域に滞在して行う地域滞在型チーム医療実習のための準備期間として、別海地区で地区踏査を実施した。地区踏査では、別海町地域の診療所、酪農家、学校を訪問し地域の生活に触れ、また町立別海病院では各職種の医療職員から講義を受け、各学生が地域の健康課題を考える良い機会となった。

##### <平成17年度>

別海町をモデル地区とした。医学部・保健医療学部3学科(看護・理学・作業)の学生が合同チームを組み、現地に滞在し、根釧地区(別海町・中標津町・釧路市)で実習を行った。患者・対象者との直接の対話を通じてコミュニケーション能力を高め、医療職業人となるための人間性教育を伴っている。また、学生は疾病予防・健康増進を学ぶことを目的として、小中学生・老人クラブの高齢者を対象に、グループ単位で学生が主体で行う健康教育セミナーを実施した。地域滞在実習の前の準備教育期間(6ヶ月間)

には医療関係者のみならず、行政側の専門家による講義を行い、また、学生グループは種々の資料を用いて自主学習、健康教育セミナー準備を行った後、地域滞在実習に臨んだ。学部を異にする学生が、この実習を通して互いの専門性を理解し、尊重するという基本的態度を身につけると共に、地域医療・チーム医療への理解、意欲の向上に繋がった。学外の地域スタッフ・住民と多くの時間を過ごす中での教育、そして両学部学生と一緒に地域で集団生活を送ることは、学生の人間性教育に繋がった。また、学生の教員とのコミュニケーションが増え、特に、他学科の教員との出会いは、多様な考え方に接する機会となった。

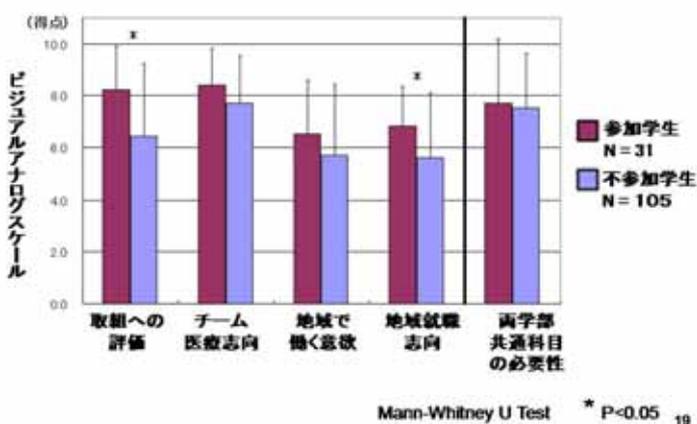
#### <平成 18 年度>

平成 17 年度の実習の反省点を生かし、実習の到達目標をより具体的に示し、集中的な実習内容を現地スタッフを交えて計画し直すと同時に、評価の改善を図った。その内容はポートフォリオ形式を取り入れ、学生の気づきを詳細に記録させ、また評価を担当した現地スタッフにお願いし、スタッフの意見を積極的に評価に反映した。

#### 目的に対する成果、人材養成面での達成度

地域滞在実習に参加した学生の1年後の意識調査を実施した(右図)。平成 19 年 2 月、両学部 4 学年学生(地域密着型チーム医療実習参加者と不参加者両方)にアンケート調査を行った。その内容は、(1)地域医療およびチーム医療従事への志向性があるかどうか、(2)地域医療およびチーム医療に携わる上でやれるという自信があるか(自己効力感)、そして(3)学部のカリキュラムへの要望、である(右図)。その結果、実習に参加・不参加を問わず地域医療およびチーム医療に関心を示し志向性を持つことがわかった。しかし、実際に地域で働くことに対する姿勢は、実習参加学生でより大きいことが伺える。また、本教育の価値をより高く評価していた。本実習の目標達成を現していると思われる。低学年では特に他学部との交流の少ない医学部学生にとっては本実習を高く評価することがわかった。すなわち、学生がインタープロフェッショナルワークの機会を望み、意欲を持つものと思われる。今後の発展を考える上で有用なアンケート結果を得たと考えている。

地域密着型チーム医療実習  
参加・不参加学生の1年後評価



#### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

学習の主体者である学生自身から、グループ討議を通じて「他学部の学生の考えも聞きたい」という合同カリキュラムの開催を強く望む声が学習レポートを通して表わされている。このことから学生自身の合同カリキュラム開催への潜在的ニーズがあることが伺えた。本取組を開始してから2年経たところで、各学部がそれぞれ行っている医学概論・医学総論(医学部)、保健医療総論(保健医療学部)の科目内容を地域医療、チーム医療教育を充実させるために再検討し、さらに合同カリキュラムへと発展させるための計画を立案するに至っている。本学の教育目標を達成すべく各学部が独自に取り組んできた科目を発展的な取組となるよう検討をすすめる予定である。その内容は、両学部共通の「地域医療合同セミナー」の開講である。「地域医療合同セミナー」では、上述の地域滞在実習・チーム体験実習の拡充に向けて、その基盤となる知識や関心を喚起する科目として1学年から4学年まで両学部共通で開講する。教育内容の企画、運営、成果に関する形成評価ならびに総括評価の主体は、学生自身、学内指導教員、コア教職員のみならず、住民・現地指導者、学外第三者を計画している。評価方法は、従来より行ってきた種々アンケート、学生による発表、レポート、ポートフォリオを用いる。学生が作成するポ

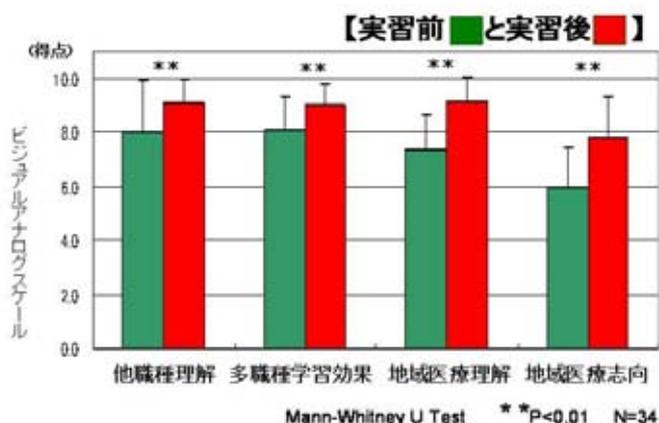
トフォリオはデジタル化し、評価をする多くの関係者と情報の収集、保存、共有、評価といった情報管理ができるよう運用方法を開発していく予定である。特に、地域の医療スタッフや住民を随所に加えて、評価や内容の改善を図ることにより地域と大学の連携がより強くなり、学生教育の発展のみならず地域の発展へとつなげていけるものと考えている。

本実習が北海道内に知られるようになり別海以外の地域から本実習の実施の要請を受け準備に入っている。また、本実習内容の視察や問い合わせが他大学から寄せられ、資料の提供を行っている。

### 学生等の評価

本取組に参加した学生が実習によってどれほどの進歩があったか、実習の効果をみるために地域滞在実習実施の前後で学生に対して自己評価アンケートを行った（10cmのビジュアルアナログスケールで項目への同意の程度を数値化）。右図に示したように、地域に滞在して実施する合同カリキュラム（地域密着型チーム医療実習）は、医療者のみならず患者・家族と接し、疾患を持たない住民の疾病予防にも目を向け、地域医療の課題にも関心を持つようになったことが伺える。地域滞在型実習、チーム体験型実習はそれぞれ、地域医療に貢献するための人材育成を目指し、早期から実体験を通して医療者の視線で地域医療に関心をもち、医療人としての人間教育となっている。

### 地域密着型チーム医療実習 参加学生の8月実習前後の自己評価



### 学外からの評価

実習中、各施設の教育スタッフに対してアンケート形式で学生の評価、実習内容の評価をお願いし、結果を公表している。また、実習終了後、実習でお世話になった根釧地域医療施設、行政、および北海道保健福祉部の関係者に出席をお願いし、学内の教職員・学生等を対象に報告会を開催した。報告会では、参加学生からグループ毎に医療施設での実習報告、健康教育セミナーの報告がなされ、出席いただいた各施設等の関係者から、講評をいただいている。講評の中で、学生が熱心に実習に取り組んだばかりか、教育への協力をいただいた関係者や患者との関係作りにも熱心であったことが評価されており、一定の成果を得ているものと考えている。また、会場から質問や今後の実習の発展に対する意見などを得ており、外部の意見を改善に生かしている。

### 取組支援期間終了後の展開

平成18年度をもって本取組に対する文部科学省からの支援が終了した後、学内でこれまで3年間行ってきた本実習の成果を検証し、本学の予算で継続して実施することを決定した。本教育は継続中である。先に述べたように、本取組の成果をきっかけとして、合同カリキュラムの発展を続ける意義を考え、更に新しい計画を立案し準備に入っている。すなわち、両学部共通の「地域医療合同セミナー」を1学年から4学年まで両学部共通で開講する予定である。また、両学部独自に行っている地域実習等に係る複数科目の合同化も計画し準備に入っている。また、これら現代GPの成果を踏まえた、学部一貫教育による学生の地域医療マインドを形成するプログラムは、特色GPに選定されたところである。